円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

第31号

昭和41年3月10日発行

日本GAPニューズレター

—1966—

第31号目次

第二の誕生 ……G・アダムスキー 1
真実の人、アダムスキー ……アリス・K・ウェルズ 3
1966年を注目せよ ……C・A・ハニー 7
質疑応答 ……〃 10
ランゲンホーの事件 ……B・E・フィンチ 13
メキシコの怪奇な目撃報告 ……15
メキシコの円盤騒ぎ ……16
シベリアの不思議な大爆発 ……18
モスクワ郊外に現われた奇妙な人物 ……20
科学者の見た金星 ……21
米国の俳優、円盤の乗員とコンタクト ……22
生と死の谷間 ……23
ニューイングランドの重要な目撃事件 ……25
ローマでのアダムスキー ……L・ツィンスシュタータク 27
UDへの誘い ……30
編集後記 ……32

第二の誕生（遺稿）

C・アダムスキー

「まことにまことにあなたがたに言うが、人間は生まれかわらなければ神の国を見ることはできない」とイエスは生命の神秘が洩らされた人々に語りました。また、天からくだってきた者以外に天へ昇る者はいないとも言っています。この〝第二の誕生〟というのは、万物を物質の世界に生み出した根元の〝因なる意識の状態〟に帰ってゆくことを意味します。万物と同様に人間も〝因の状態〟からくだってきた（生まれ出た）のですから、〝永遠の生命〟を楽しむためには、その意識の状態に帰る必要があります。

人間が物質の世界に生まれたとき、結果（現象）の状態でもって迷うようになり、広大な〝因の状態〟の記憶を失ってしまいました。その結果、有限のセンスマインドの指令に身をまかせてしまい、〝宇宙の意識〟の指導にたいしては目を閉じています。人間の生命の目的のハケ口は結果の世界において制限されるようになっています。人間の注意力のすべては物質の分析に向けられ、物質の背後にある〝因〟にたいしては盲目となっています。ゆえに本来の真の自我に立ち返るには先ず生まれかわらねばなりません。宇宙の無限の意識的な知覚力の中に生まれかわるのです。

第一の誕生は本人に自分と同様の物質界の理解力を与えましたが、第二の誕生は〝因〟の理解力を本人に与えていません。今や人間の義務は、制限のきずなを打破して、地上という子宮から飛び出て、すばらしい〝因〟の広大さを知覚することにあります。

第二の誕生は意識体または肉体の死を意味するものではありません。それはあらゆる生命との一体性における意識の二つの面の結合を必要とします。パウロは次のように言っています。「われわれは地の似姿を持っているが、また天の似姿をも持っている」。第二の誕生―すなわち生まれかわりは天と地とを結合させて無限の意識を生じさせます。肉体人間としての概念と宇宙的な知覚力が等しくつり合うようになり、人間は〝父の国〟について知り始めます。限定された知覚状態にある人間は目下〝父の国〟の広大さの中で迷っていて、永遠の生命を求めることができません。しかしここで生まれかわって〝神の遺産〟を引きつぐならば、彼はもはや迷うことはありません。なぜなら、どこを見ようが何を研究しようが、それによってたえまなき活動の存在することがわかり、本人はこの活動が〝父〟の目的をあらわす生命にほかならないことを知るからです。

教師や聖職者は以上のことを理解しなければ他人や自分を救うことはできません。イエスは次のように言っています。「各人は自分自身の重荷を負っている」。自分にとっての救世主は自分自身です。ところが人間は自分だけにとらわれて〝因〟の中の一結果となり果てていますので、〝父の国〟の広大さと自身との関係を知ることによって〝父の国〟の中にいる自身を発見する必要があります。

もし人間がわずか数千人の人口しかない見知らぬ都市へ入って

ゆくならば、道に迷ってもと来た方向へ引き返すのには人に尋ねなければならないことがあるでしょう。その近辺の地理にくわしくなって、行動の確信をもって歩きまわれるようになるまでは全然自由とはなりません。もし人間がせまい世界のさなかで簡単に迷ってしまうならば、境界のないこの広大な宇宙の中では完全に迷ってしまうということや、その中で自分を発見するにはより長い時間を要すると考えるのは不合理でしょうか。

第二の誕生とは知覚の誕生なのであって、それによって人間は物質の束縛から解放され、時間と空間の限界からのがれるのです。それは暗黒の無知という限界から全知の知覚の世界へ意識が生まれ出ることです。これを宗教的狂信による神話的な幻影と混同してはいけません。

こんにち、いわゆる精神主義者よりも多くの科学者のほうが第二の誕生に近づいています。或る偉大な科学者は次のよりに言いました。「私が心の努力に疲れはてて問題を考えることをやめると、そのときこそ問題の真の解答がやってくる」（注。これはトーマス・エディスンの言葉として伝えられるもの）これが瞬間的な第二の誕生です。肉体人間の意識が広大な宇宙の意識の御手にゆだねられて、制限というヴェイルがはがれると、真理が急速に姿を現わしてくるのです。

天文学者は宇宙のドアーを開き、宇宙で行なわれている活動を伝えます。科学者は活動を規制している諸法則を立証し、化学者は因の世界へ入ってゆきます。化学物質や化合に関する知識が新しい誕生への道を開拓するからです。人間の直感のひらめきのすべてはより大いなる生活への一段階となります。現象界で観察することによって得られる新しい啓示のいずれも、無限の知覚力へ通じる一里塚です。第二の誕生に関して不可解なことは何もありません。それは発展であり、生長でもあるのです。人間がいつも〝父の国〟にいるということ、そしてもし望みさえすればその国へ入ることを許されるということはわかってきます。隠されている物事は必ず洩らされるときがきます。人間が地上の生命を知覚するようになるにつれて、人間はより大きな〝因〟を知覚するようになるでしょう。

〝父の家〟の中の幸福な王子になるのは人間の義務です。そうするためには家そのものにまず気づかねばなりません。と同時に、〝天（因の国）〟へ入ろうとするならば今自分がその〝天〟の中にいることを知覚するようにならねばなりません。そしてこの天の中には多くの住家（惑星）があることを知らねばなりません。ちょうど広大な宮殿の中に住んでいることを自覚するためには、その中に多くの室があることを知らねばならないのと同様です。

人間が活動の原因ばかりでなく物体の構成についてもより多くを知ろうというたえまなき衝動が各人の心に起こることについてその解答はここにあります。結果（現象）としての子供に広大な宇宙を知らせようとするのは〝因〟なる両親であって、そのために人間は〝父〟が絶えず与えねばならぬすべての物事を楽しむことができるのです。

以上が第二の誕生です。すなわち、〝因〟の無限の領域を知覚することと、決して現われることをやめない、万物を包含する、常に活動する生命とを知覚することです。

真実の人、アダムスキー

アリス・K・ウェルズ

一九六五年のクリスマスがやってきました。美しい鐘の音が澄んださわやかな朝の空気の中に鳴り響き、あの〝平和の王子〟の誕生の記念日の到来を告げています。この鐘の音は世界中に聞かれ、更に宇宙空間の果までも響いてゆきます。

するとその音は大きくこだまして返ってくるように思われました。あらゆる生命はこの波動にこたえました。みな〝愛〟の琴線が鳴らされて、全創造物の憐みと美と喜びとを感じ取ったからです。大気は陽気さで満ちて、一つの印象が次のような声としてやってきました。「宇宙の息子や娘たちよ、ただ一人の宇宙の父をいただく人の子や娘たちよ、喜び楽しめ。あなたがたの多くはキリストの誕生を迎えるために自身の心というウマヤを適当な歓迎場所にしているからである。あなたがたの針路図の作成に援助してきたわれわれは、あなたがたの誠意をうれしく思うものである」続いて沈黙—しかし真の沈黙ではありません。小鳥たちは創造物の愛の歌を歌い、花々は自然の美と芳香を放ち、人間の心は兄弟愛と、生命の授与者への感謝をあらわして一体となっていました。

以上は、地球を出現せしめ、〝子供たち〟のすべての心を神性で満たした〝父〟からの贈物でした。

私たちはこの生得権にたいして〝父〟に心から感謝しますとともに、この休暇が幸福と愛の一つにならんことを祈ります。今年このクリスマスは今後長いあいだジョージ・アダムスキーから書かれたメッセージのやってこないその最初のクリスマスです。しかし彼はいつが私たちの中に混じって人類に真理を伝えようというわれわれの努力を推進し導いてくれるものと確信します。そしてこの世界を住みよい場所にしようとした彼のうむことのない努力の報いを彼は受けたことを喜ばしく思います。

◎以下に記す積極的な計画はヨーロッパの二名の熱心な協力者から私の意見を求めて送られてきたものです。これが遂行されれば当方で出している情報パンフレットの継続刊行はともかく可能でしょう。

アダムスキーの死後〝GAPの未来の計画〟がデンマークのハンス・ペテルセン少佐から送ってきました。この目的はジョージ・アダムスキー財団を通じて、他の惑星から人間が地球へ来るという知識を広めることにあります。

『国際GAPの未来計画について。　ハンス・ペテルセン記

一九五八年にジョージ・アダムスキー氏は自己の体験や自分が円盤に関して得た知識を、興味をもつ人々に伝えようという目的のもとに〝GAP〟なる団体を設立しました。（注。実際は一九五八年より以前にさかのぼる）その後この活動は〝国際GAP〟として発展し、一九六五年四月に彼が他界してのちも存続しています。

今やアダムスキー氏は姿を消しましたので、彼の思想や知識は私たち協力者の手で強力に広められねばなりません。

六三年にアダムスキー氏がヨーロッパを訪問したとき、彼はス

キャンディナヴィアに滞在し、そのときSUFOI（スキャンディナヴィアUFO情報）のリーダーで、またGAPのリーダーでもあったデンマーク空軍少佐ハンス・ペテルセンと共にすごしました。一週間の討論の終りにアダムスキー氏はヨーロッパ、アジアその他の地域をまとめて、一九五七年に設立されたSUFOIと同じ線に沿った一大グループを形成するようにうながしました。

この提案は何度も熟慮を重ねて方法論が討議されてきましたが、容易に満足すべき結論に達しませんでした。デンマーク人の考え方を他国人にあてはめるのは困難であるからです。しかし現在までにノルウェイ、ベルギー、英国がSUFOIに似た団体を作っています。（注。GAPを組織している国は実際には十ヵ国以上にわたっている）しかしこれだけでは不充分です。

それはともかくとして、アダムスキー氏のアイデアを継承することによって彼が描いた夢と新しい計画はゆっくりと具体化しつつあります。アダムスキー氏を支持した人のすべてが私たちに協力し、このアイデアを百パーセント生かすならば、この計画は発展してゆくでしょう。

簡単に説明しますと、計画というのは次のとおりです。国際的な情報サーヴィスを組織して、状勢を分析し、その結果を英文機関誌を通じて関心ある人々に伝えようというわけです。この機関誌は世界各国の著名な政治家や科学者、教会、UNESCO、ラジオ、テレビ放送局などに送られます』

◎ロウランド・クセラ氏の意見

次の抜粋は、一九六三年中のクリスマス・シーズン中に、当時金星から来た人と会ったとして驚くべき人物と目されていたアダムスキーに関して書かれた或る記事から取ったものです。これはコンタクトに関する特殊な情報としてでなく、アダムスキーの発見について「あり得ることだ」という個人的な意見を述べたものです。これはまた当時の筆者クセラ氏の受けた印象のテストとして十二年後のこんにち貴重な資料となります。もともとこれは雑誌に掲載する意図のもとに書かれたものではありませんが、アダムスキー氏は目を通しました。

『コロンブスの時代には発見というものは一人の熱意ある人が他の熱意ある協力者を統率して行なわれる肉体的な探険の結果によるものであり、探険者たちは証言のために故国へ帰ったものである。

二十世紀は科学的哲学的な発見事物を用いて行なう、驚くべき精神的探険の時代である。こんにちの熱意ある人はコロンブス時代の人と同じ知力を持ってはいるけれども、比較にならぬほどの高度な教育を受けており、通信機構の有利さを持っている。したがって新発見や新発見物の理解はすばらしい勢いで増加している。

いつか人間の探険の衝動が、間接的な観測よりも多くの方法でこの惑星の限界に挑戦し始めるということは不思議ではない。しかし未踏の領域に新しく一歩を印するにあたって、発見者たちは未発見の岸辺の不確かな石の上に安全に足を踏みしめるために確実な歩みを続けている。それから発見者は新しい岸辺に挑戦するのみならず、自分自身にも挑戦するのである。自分自身や科学及び哲学的思想にたいする自信は絶大なるものなるがゆえに、当座自分の心中にある新しい概念をテストするのを安全に感じることができるのである。また本人の探究が広がれば広がるほど、本人

の知識と理解力も向上するのである。

ジョージ・アダムスキーの発見は絶対に偶然のものではない。彼は〝コロンブスを発見したインディアン〟ではなかった。アダムスキーやその他のコンタクティーたちが独特な個性のためにブラザーズから選ばれたと信ずべき多くの理由がある。その個性が何であろうとも〝訪問者たち〟にはよくわかっているのだ。しかしたしかにブラザーズは、アダムスキーこそ古い岸辺と新しい岸辺の両方に確固たる立場を保つことができると断定したにちがいない。

ジョージ・アダムスキーの発見事や探険をあえて信じようとする人々は、彼がそうであったように、或る程度用意ができているのだろう。このための特定な時とか方法とかいったものは存在しない。アダムスキーの場合と同様に、如何なる発見のキーも個人次第である。だが〝訪問者たち〟はこの地球上の人間の大多数は今世紀最大の先駆者（アダムスキー）にさほど遅れをとることはないとみなしていると信ずべき多くの理由がある。

人間の歴史におけるこの十八年間は文字通り無数の円盤目撃事件で満ちていた。もちろん、これは同時に続いた否定のアラシの十八年間ほどにハッキリしたものではない。この主な理由は、目撃事件が発生すればするほど否定のほうがはるかに一般性をかちとるからである。この否定の仕方は性格が全然変わっていない。またこの十八年間円盤目撃の内容も変化していない。

この十八年間平和と安全がわれわれの思想に帰ってきた頃、別な円盤事件が発生した。（注。アダムスキーの事件を意味する）しかし依然としてそれを吸収するのが困難なのは政府筋であった。しかし十八年以上にわたって発生した事件のいずれをも消すことは多少とも困難であった。実際、多数の人々が円盤の存在を信じているし、円盤は今後もたびたび出現するだろう。

円盤とは一体何であるのか。また一体何でないのか。〝空飛ぶ円盤〟は罵倒され嘲笑されているが、多数者によって目撃される空中現象に関する〝強固な〟用語である。円盤はこの地上で知られている如何なる飛ぶ機械とも完全に異なった行動をし、出現する。十八年前と同様に想像もできねば作ることもできない。しかし円盤がそうでない理由の一つは、それが未確認飛行体のままでないということである。たしかにそれは確認されてはいないし、多数者が正体を知っていない。しかし写真という証拠物件を提供できる多数の人にとっては円盤の正体はわかっている。現代が詭弁を弄する時代でなければ円盤はＩＦＯ（確認飛行体）と呼ばれるだろう。

ジョージ・アダムスキーが撮影した円盤写真や映画は独自なものではない。彼が最初に円盤写真を公表した一九五〇年から五五年にかけて多くの人が円盤の写真を撮っている。しかし多数の人にたいしてアダムスキーの写真は大声で話しかけてくる。だがこの写真から結論を出そうとする人は少ない。これはこの問題にまつわって起こる混乱と不可解さのためである。しかしこのために一人の男が大胆な立場に立って先駆者となった。そして自己の発見事を公表しようという強固さと誠実さを持っていた一人の男のためにわれわれは現在のような円盤についての豊富な知識を有するに至ったのである。またその男は自分の出費でもってそれをやったということも忘れられてはならない。

アダムスキーの体験以前に二種類の異なる時間と場所において〝葉巻型宇宙船〟を目撃したという或る夫妻と更に別な人と私は話し合ったことがある。彼らはアダムスキーについては全然知っていなかったし、互いに顔見知りでもなかった。その夫妻に詳細な質問を試みてからアダムスキーの葉巻型宇宙船の写真を見せたところ、夫妻が見た物はちょうどこれと同じような物であったと証言した。

MOLP（類似現象の多数者目撃）は人間の目撃した事柄を調査するのにきわめて有効な力を持っている。

私は二つの異なる時間と場所において円盤を見た三人の子供を知っている。あまりに接近して見たので、円盤の基本的な輪郭や球型着陸装置、丸窓、キャビン、フチなどをはっきり見たという。注意深い詳細な質問を発してからアダムスキーの円盤写真を見せたら、彼らはMOLPの事実を証明した。

円盤や葉巻型宇宙船を撮影した人々は他にも沢山いる。彼らはおそらく自分の目撃を友人や刊行物の編集者たちに納得させようとしたことだろう。そして自分が真実を語っているのであると力説したことだろう。ところが例外なくこの人々は議論と恐怖と混乱の荒野の中の淋しい声として吹き飛ばされてしまう。この人たちは自分が何か異常な物を見たということを疑いなく知っている。しかし孤独な人として彼らは周囲の強い否定的反応にもかかわらず、自分の信念を確証するような反響にしばしば出会うこともある。目撃者の殆どは自分が見た物について官憲からきわめて基本的な尋問を受けているが、それは自分たちが実際には何も見てはいないのだと思い込まされるためである。ところが多くの場合において官憲も各方面から送られた明瞭な写真を見ているし、官憲のカメラの多くも幻影を写したりしないことを知っているのである。

円盤を地上へ降ろそうではないか！　荒野の中の多くの孤立した声の証言者として世界中に散在している無数の立派な円盤写真のすべてを大衆に見せてそれを自分に判断させることは大衆にたいするアピールとなるだろう。されば証言者たる円盤写真を集めよう。そして自分の目でそれを見ようではないか。読者中に円盤写真を所持する方がおられれば、ぜひコピーをお送り願いたい』

（注。ロウランド・クセラ氏宛）

◎一九六六年二月六日から毎月第一日曜日にヴィスタのGAP本部において右のロウランド・クセラ氏の講演、討論会が午後二時より四時まで行なわれます。クセラ氏は社会学者として出発し、結局電子工学技師になった人で、この両方の分野で学士号を持っています。今年最初の会合の際は、南ケアリフォーニアのGAP会員の方でアダムスキーの円盤写真映画を見ることに興味のある方はクセラ氏の講演を聴くことができます。

もし頭（こうべ）をめぐらすを得ずば
如何にして影以外のものを見るを得んや？
—プラトー〝レパブリク七巻〟—

一九六六年を注目せよ

C・A・ハニー

一九六六年一月五日に私はカリフォルニア州サンタアナでマイクル・X・バートンの講演会に出席しました。私はかねてから心霊的なコンタクティー（注。心霊的な体験によって宇宙人に会ったと称する人）の講演会には行かないことにしているのですが、この会合に出かけたのには特別な理由があります。その理由とは或る機関誌に掲載された次のような広告です。「マイクルの体験実話！　ネヴァダ地方へ旅行中に円盤群が出現して、その一機が付近の山に着陸し、マイクルの磁石の極を変えてしまった。北のかわりに南を指している。講演会でこの磁石をごらん下さい」

なるほど演壇のそばのテーブル上にその磁石が置いてあります。バートン氏が体験の証拠物件としてそのコンパスを見せてくれるならば見たいものだと私は思っていました。それでのぞいてみるとたしかに彼の言うとおりです。

これは私が次のような陳述をして樹木を証拠物件とした場合と同じ証拠物件です。

「先日、一機の円盤が私の家の裏山に生えている一本の木のそばに着陸した。それを信じないならば証拠を見せよう。私の家まで来なさい。そうすればその木を見せてあげます」

もちろん円盤は磁石に影響を与えることもあるでしょうが、このような証拠物件を大衆へ見せたところで何にもならないことはたしかです。円盤に関して私が自分の体験や主張を公表しない主な理由は以上のとおりです。如何なる種類の証拠物件を私が提出できたにしても、例の磁石と同様に何にもなりません。

◎先般イングランドで円盤が撮影されましたが、今度はその写真を掲載しますから読者は自分で判断して下さい。（注。かなりボケているため本号への転載は中止した）

◎メキシコでは過去数週間にUFO事件が急増しています。この号ではメキシコから入った情報を少し載せます。"背の高い、赤い目の、鼻のない宇宙人"に関する記事が、円盤・宇宙人問題について全く無知な恐怖にかられた人の手になれば、事実が如何にゆがめられるかということを示しています。目撃者が実際には何を見たかはおわかりでしょう。つまりヘルメットの前部にのぞき窓の付いた宇宙服を着た人間を見たのであって、おそらくそのぞき窓からライトが光っていて、それが大きな赤い目のように見えたのでしょう。あるいは地上を探索するために使用されるロボットに出くわしたのかもしれません。これは別な太陽系から来たためにこの地球になれていないので、地上に足跡を印する前に探険用ロボットを送り出したのだとも考えられます。

◎以前に掲載したボブ・ガイアーの記事はきわめてすぐれていますので、ここに再録します。多くの円盤講演の背後にある動機に関する彼の考えは私の考えによく似ています。彼の記事は読者に何かを考えさせるでしょう。「円盤の講演などで聴衆を宗教団体に引き込むような言辞を弄する人を警戒しなければならない！」

たびたび述べましたように、円盤は心霊的、宗教的な性質を帯びてはいません。円盤に乗っている人々は、地球人との連絡に心霊的、宗教的、超現実的、霊媒的、霊交的な方法を用いません。マイクル・X・バートン氏が円盤からメッセージを受けたときに応用したと称している〝クリア・チャヌル（注。一種の霊交法）〟なるものは円盤のパイロットとは何の関係もないことです。

◎多くの人々は次のような質問を発します。「円盤が実際に地球上に着陸したり上空を飛んだりしているとすれば、なぜ政府はそれを捕えようとしないのか？」「なぜ円盤は積極的に着陸して政府要人と会見しないのか？」等々。

いわゆる空飛ぶ円盤に乗っている人々は、金星、火星、土星、その他の多くの惑星からこの地球へ来つつありますが、更にそれ以外の円盤でこの太陽系以外の世界から来るのがあって、それらは必ずしも友好的ではないかもしれません。私が特に金星、火星、土星というのは、地球人にまじって働いている惑星人の大多数は右の三つの惑星のどれかから来た人であるからです。

米国は惑星人の往来に干渉してはいません。これはきわめて合理的な理由があるからです。つまり、とにかく米国は惑星人に干渉したり指図したり、円盤の飛来をけん制したりするほどの力を持っていないからです。他の惑星から来る円盤は如何なる時でも自由に地球へ出入りしますが、地球人がこれをけん制するには完全に無力です。もし円盤を捕えようとすれば、惑星人はレーダーの電波に捕えられないような方法を用いてレーダーのスクリーン上にさえ出現はしないでしょう。

もしこの〝訪問者たち〟がその気になりさえすれば、数分間で地球を征服するでしょう。それにたいして地球人は全然抵抗はできないでしょう。彼らは先ず全地球上の電気を完全に停電せしめるでしょう。最近発生した米国東部の大停電事件は、停電によって地上に荒廃をもたらす可能性を示しています。しかるに彼ら惑星人がこれまでに地球を征服しようとしなかったという事実そのものは、彼らが地球にたいして高貴なる意図を有していることを証明しています。

懐疑的な心を持つ人は、円盤を捕えたらどうかと放言しますが、われわれにはそんなことをする力はありません。惑星人のすばらしい技術をわれわれは凌駕することはできないでしょう。右の質問は〝暴行〟〝貪欲〟〝他人にたいする支配〟といった言葉になれて思考している多数の地球人の態度をあらわした典型的なものです。こうした態度こそ現在地球上で発生している多くのトラブルの原因となっています。こんな質問を発する人は他の惑星から来る人を捕えたり、やっつけたり、殺したりすることだけを考えています。だから多くの人は正体不明の円盤を銃で射とうとするわけです。

政府が円盤にたいして無力であり、同時に大衆を守るのにも無力であるのですから、もしわれわれが「敵意ある宇宙船から自分たちを守ってくれ」といっても、政府はその〝訪問者たち〟が他の惑星から来つつあるのだということを大衆に認めさせることはできないでしょう。こんにち多数の人々が、自分よりも大きな強い力が存在しているのではないかという考えのもとに恐れおののいています。この人々は、或るすぐれた人類が地球人にみずからの道を行かせ、みずからの手で学ばせようとしていることを想像

することはできません。一般大衆にたいして「自分たちで考えることを許してやってはいけない」と思っている政治屋の多くが右のような態度を示しています。しかしなかには、近い将来に一定数の人が自分たちで考え得るという事実に目覚めるだろう、そして各国政府が長いあいだ秘めていた知識を公開するだろうと言う人もあります。

金星、火星、土星などから来る人々は、"まさに今"われわれ地球人のなかにまじって住んでいます。彼らはわれわれの衣服を着て、われわれの車を運転し、われわれの家に住み、政府の諸計画に基づいてわれわれの科学者と共に働いています。

政府の或る高官（複数）は地球に住むこうした惑星人の正体を知っています。ただしこれは惑星人が或る特定の人だけに自己の正体を洩らした場合に限ります。そして或る壮大な計画が樹立されつつあって、この計画は惑星人との協力のもとに各国で実施されることになっています。一九六六年中には或る問題について読者を驚嘆させるような多くの事実を私は公表するつもりです。

◎私が故アダムスキー氏の重要な仕事を引きついで以来、ちょうど第五年目になります。要約すれば、この仕事は円盤及び他の惑星の人間に関心を持ち、より多くを知りたいという人にたいして信用ある情報を提供することにあります。この時代において円盤・惑星人問題に関心を持たずに疑っている人は、よほど重大な事件が発生して心中のわだかまりを吹き飛ばさない限り、いつまでも無知のままにあるでしょう。目を開いて注目しさえすれば事件はどんどん発生し続けていることがわかります。

宇宙から来る訪問者は、各国政府が大衆に円盤問題の情報を公表するように政府へ積極的に働きかけてきたということを少し前に書いたことがあります。たしかに惑星人の活動は行なわれてきたのであって、あとで述べるように今後ももっと行なわれるでしょう。世界の多くの地域で円盤の目撃も増加するでしょう。一九六六年の最初の三ヵ月間のいつか、大きな円盤騒ぎが起こっても私なら驚きはしません。

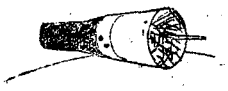
◎十一月九日に米国北東部一帯に起こった大停電は、カナダのオンタリオ州クィンストンのサー・アダム・ベック第二発電所で発生した継電器の故障のせいでした。イーリーオーの住民はその故障中に巨大な宇宙船が頭上に現われたと報告しています。またこの十一月九日の大停電中に各地でUFOが出現したことが伝えられています。その時以来、別な発電所でしばしば故障が発生しました。ケァリフォーニア州で一件、ニューメキシコ州で一件、最近はイタリアで一件起こっています。ケァ州の官憲は、回路の状態によって同州の南部地区全体が停電になることはないといっていますが、私に言わせれば、ケァ州南部の全体を完全に停電させることは可能です。数機の円盤を投入すればことは簡単です。とにかく今年発生する各種の異常な出来事に注意して下さい。

たいていの無知は克服することができる種類の無知である。

われわれは知ろうとしないために無知でいることが多い。

—オールダス・ハクスリー—

質疑応答



C・A・バニー

問　円盤写真のなかには、撮影者には何も見えなかったのに現像したらUFOが現われたという例がよくありますが、これはどうしたわけですか。

答　大抵の場合それは次のうちのどれかです。フィルムのキズ、カメラの光線洩れ、レンズの光学的影響（特にズームレンズに多い）、現像中に使用される器具によってついた点、ゴミ等々。

ごくまれにホンモノのUFOが撮影されることがありますが、その答は簡単です。動作や目的について秘密を保持するために長く用いられてきた或る種の宇宙船は四百フィート以上の距離になると人間の目には見えないように作られています。真の距離は船体から放たれるフォースフィールドの強度やその他各種の要素によってきまるのです。ところで、船体の周囲のフィールド（磁場）は肉眼には見えませんが、写真用フィルムは肉眼で見える範囲外の光の波動に感応します。この感応力のために、ホンモノのUFOを撮影した場合に霧のような、またはピンボケのような輪郭が現われます。フォースフィールドの放射線がフィルムに影響を与え、霧のような輪郭にするわけです。

問　アダムスキー氏がかつて生存中、ロードアイランドのウーンソケット市で非公式の会合に出席したとき、数年前に政府高官から一惑星人に三十五ミリカメラとフィルムが渡されて、金星の都市を撮影して持って帰るようにと依頼されたということですが、これは真実ですか。

答　真実です。この写真は米政府のトップ・シークレット（極秘事項）として厳重に保管されています。私が言えるのは次の事だけです。すなわち、金星の都市や住民を撮影したフィルムは撮影後依頼者に返却されました。現段階ではこれ以上の事は言えませんが、いつか政府は秘密情報を公開してア氏の主張を確証するでしょう。アダムスキー氏の主張は途方もないような事ばかりですが、絶対に真実なのです。

読者はかの有名な〝ストレイス書簡事件〟を記憶しておられるでしょう。（注。一九五七年に米国務省文化交流委員会のストレイスなる人物がアダムスキー宛に公式の書簡を送り、ア氏の体験の真実性を確証して激励したが、後に国務省はそのような書簡を出したおぼえはないと称してこれを否定し、物議をかもした）私はその当時ア氏のところで働き始めたばかりでした。ここにその書簡の一部を再録しましょう。「ワシントン市国務省・・・・・貴下の体験については、国務省がその調査を行なっていることや、多くの結論に達し得たということを貴下に納得していただきたい。国務省が貴下の主張を証明する確固たる証拠を多数入手していることを貴下は喜ぶであろう・・・・」

この書簡には米政府国務省のシールが付けてありました。連邦捜査局（FBI）がこれを研究所で精密に調べた上で、シールと用紙がホンモノであったことを確証しています。用紙は盗難にあ

ったものとも考えられぬことはありませんが、押印機に触れることができるのはわずか数名の高官だけです。この書簡がニセモノであったという反証はまだ出ていません。

問　あなたの哲学（テレパシー講座その他）は非宗教的、非政治的なので、それは自由主義的といえますか。宗教に関する限り、あなたは不可知論者なのですか。

答　現代においては物事を分類して名称を付けることがあまりに重視されています。率直にいえば、私はこれまで自分自身に〝自由主義者〟その他の名称を付したことはありません。政治的な事柄に関する私の意見の多くは、或る場合に共和、或る場合に民主の側の思想をあらわしています。私はあらゆる思想から善なるもの—すなわち望ましくない物事を排除すること—を認めて実行したいと思っています。私は自分を不可知論者とみなしてはいません。不可知論者とは神が存在するかどうかを知ることは不可能であると考えている人を意味します。私は神が存在することを知っています。ただ神の正しい性質を言葉で定義することは人間にとって不可能だと申しましょう。しかし神は宇宙のドまんなかのどこかに存在する物質的な存在物だとは思いません。これまでに書いた多くの論文中で私は〝意識的な力〟とか〝ソウルマインド〟等の言葉を使用しましたが、これは人間が神と名付けているものを表わします。神は遠い宇宙の中にいるのではなく、あらゆる物質や存在物をつらぬく〝巨大なフォースフィールド〟として存在しています。われわれはこの〝力〟の結果として現われた物を分類して名称を付しているだけです。実際には、神という言葉は〝語の意味する物〟を持たないのであって、多くの意味を有しているのです。

問　ソ連のいわゆる〝秘密政府〟はジョンソン大統領にたいして〝心の力〟を応用していると思いますか。

答　私はソ連その他の国の秘密政府なるものを知りません。ソ連政府の要人連は米国政府と同様にその正体が公表されています。ジョンソン大統領に関する限り、彼は惑星人から影響を受けていると思われるような物事をかなり実施しています。一方、私は米国の社会福祉計画類に賛成できません。カルマの法則は必ず実現するのであって、大衆というものを彼らが受け入れることのできない考え方のワクの中にはめることはできません。人間はすべて画一的な生活をするように創造されているのではなく、平等な〝機会〟を与えられて創造されているのです。

問　人間の考えでなく宇宙の法則に基づいた宗教がありますか。

答　私が自分の研究で知った限りでは、宇宙の法則や原理に従った宗教は存在しません。もとは正しい基礎をもって出発した団体でも、長い時代にわたって〝宗教〟と化しています。総体的に現代の宗教をながめれば、その教義の九十パーセントまたはそれ以上が〝人工的〟であるといえるでしょう。

問　死の恐怖や超自然的なものにたいする恐怖を克服するのにより方法はありませんか。

答　こうした恐怖の殆どは幼児のときから吹き込まれる宗教的な教えに起因します。これを証明するには、宗教というものが発生した様子や、「自分の言うことを信ぜよ。さもないと汝は永遠に地獄の火の中で焼かれて苦しむだろう」というようなことを教祖が如何なる権威をもって言えるのか、といったことを考えてみる

必要があります。これを詳細に検討するには、私の著書〝宗教の起源〟、ジーナ・セルミナラ博士の〝多くの館〟〝多くの生活、多くの愛〟やアダムスキー氏の〝空飛ぶ円盤同乗記〟などをお読みになるとよいでしょう。特に〝空飛ぶ円盤同乗記〟は惑星人の言葉でもって、人間がこの世界に来た様子、なぜこの地球で生まれたか、死後どこへ行くかなどが述べてあります。私の〝テレパシー講座〟にもそれが述べてあります。死とは一軒の家から別な家へ移動することにほかなりません。これを何度もくり返すことによって次第に〝人間の真の自我〟の〝真の性質〟を知るようになり、病的でなく、新しいレッスンと驚異的な事物を学び取ろうという期待に燃えて、死を恐れるかわりに次の生涯の冒険を待ち望むようになるのです。テレパシーをまじめに研究する人は、死によって個人の存在を中断することは不可能だということがわかるでしょう。それは科学的にいって不可能な事なのです。

問　地球の人間と他の惑星から来た人間との正式なコンタクトにおいて実際に用いられる会見のテクニックはどんなものですか。

答　もし惑星人が地球人とコンタクトを望むとすれば、個人的に対面して話し合うような会見を望むでしょう。或る場合には宇宙船を近くに着陸させることもありますが、これは内部から出てくる人間が惑星人であることを相手に信じさせるためです。宇宙船を用いない場合は他の方法によって惑星人たるの証拠が示されます。コンタクトする相手の地球人次第で、さまざまの方法が用いられるのです。しかし宇宙船を（円盤等を）実際に見せないでコンタクトする場合、それは関係者たる本人以外には意味をなしません。ゆえにその事件に関して当事者は他人にしゃべらないほうが賢明です。通常このようなひそかなコンタクトは、地球上の科学的な努力に関与するという重要な理由のために行なわれます。各国の主として科学者とひそかなコンタクトが行なわれることが多く、これはほとんどすべて極秘にされていて、外部に洩らされることはありません。

問　一九六四年四月にニューヨーク州で発生したというウィルコックスの火星人とのコンタクトにおいて惑星人から伝えられた情報なるものは、あなたやアダムスキー氏の情報と一致していません。或る惑星人はウソをついているのですか。

答　かりに二十名の人が何かの事件を目撃した場合、どうなると思いますか。この人たちを別々にして個々に質問してみれば、みな内容の異なる話をするでしょう。しかしこの人たちがすべてウソをついているのではありません。各人は自分こそ真実を語っているのだと思っているのでしょうが、地球の人間の心は何かの既成概念を持っていて、それに適合させようとして真相に色をつけたり、手を加えたりします。如何なる事件の如何なる説明にも個人的意見が少しは忍び込みます。この点を別な側からみれば、他の進化した惑星の人間といえども万人が全く等しい考え方をするロボットではありません。或る惑星人は別な惑星人と異なる考え方を持っています。もし地球にいる惑星人のすべてに同一の質問を発した場合、彼らはそれぞれ異なる回答をするでしょう。これは彼らがウソをついているのではなく、質問に関する彼らの知識の内容が異なるからです。

しかし、もし或る惑星人が金星や火星には生命は存在しないと言ったとするならば、私はそのコンタクトを虚偽であるとみなし

（26ページに続く）

ランゲンホーの事件

バーナード・E・フィンチ

一九六五年九月十四日にエセックス州マーシー島付近できわめて興味ある目撃事件が発生した。この事件は午前一時に起こったが、これは年令二十九才のポール・グリーンという名のインテリ技師が体験したのである。彼はこの体験によってかなり動揺したが、事件の全貌を記録するだけの余裕はあった。

事件より二週間後に私は（筆者フィンチは）彼と会見し、二名の立会人の出席のもとに尋問を試みたが、彼の物語は疑いもなく真実であり、加うるに肉体がきわめて強力な磁場の影響を受けた結果であるとしか考えられない種々の主観的徴候について述べた。見たところその磁場は大変に強力であったので、科学では未知の一種の光を発生したという。

以下はポール・グリーンの体験を本人の言葉どおりに再録したものである。

「私が最初にその〝物〟を見たのは九月十四日の日曜日、午前一時頃でした。明るく晴れた夜で、月が出ていて、頭上で輝いている星々を見ることができました。コルチェスターにいる私の許婚者を訪問したあと、ウェスト・マーシーのわが家へ帰る途中でした。酒を飲んではおらず、すこぶる元気でして、モーターバイクで走っていて、時速約四十マイルでした。ランゲンホーの数マイル南にあるピート・タイ公道にさしかかる直前に一台のスクーターに追いつきました。私のバイクはうなりをあげていて、エンジンは快調に響いていました。

ランゲンホー公会堂の南側に伸びた直線道路に近づいたとき、左手の上方に（東側に）ブーンという高い音が聞こえました。この音は次第に大きくなりましたので、飛行機でも接近して来るのかと機影を求めて見上げたのですが、何も見えず、東方の約五マイル離れたブライトリングシーあたりの上空に一個の小さな青い光点に気付いただけでした。ところがこの光点がまたたいていて、急速に大きくなるのです。そこでこれはランゲンホーの沼地の上空あたりからこちらへやって来るのだということがわかりました。ブーンという音はたいそう大きくなってきて、高音のうなり音に変わってきました。光と音とは関連があるということがわかってきました。すると私のバイクのエンジンが不調になってプスプスいい始め、数度とまってからついに完全に停止し、ライトも消えてしまいました。青い光点は東方約一マイルの彼方に近づいています。輪郭がやや識別できたと思ったら、巨大な物体が空中を走ってきて、薄気味悪い姿を現わしたのです。それは大きなコマの上半分に似ていて、ガスタンクほどの大きさです。頂上にはドームがあるのがわかってきて、その内部には奇妙な青い光がきらめいていました。物体はゆっくりと下降しながら傾きましたので、底部をチラリと見ることができました。周囲は多数の円い物でフチどられていて、全体がボールレイス（注。玉・ころ軸受の環体）に似ていました。

私は車から降りて、物体の方へ数歩接近しましたが、呪文で縛られたような感じがし、マヒにかかったように動くことも声を出すこともできません。きらめく青い光は激しくなったので直視す

急

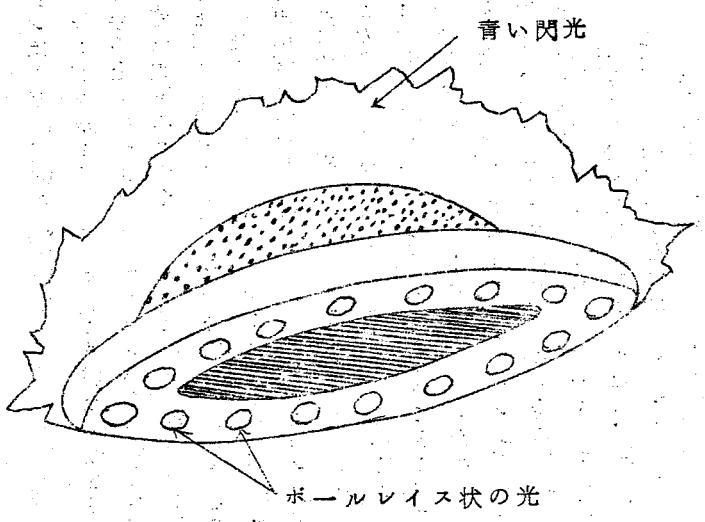
ることができず、しかもそれは私の心臓の鼓動と同じリズムで変動しているようであり、私の胸を打っているようでもあります。このとき全身がヒリヒリ痛みましたが、それは家畜用の帯電サクに長く触れているときに受ける感電のショックとは少し異なるものでした。うなり音は静かになり、数軒の農家のあるウィックの地区に物体が着陸しました。

突然、路上で私に追いつかれたスクーターが接近してきましたが、そのエンジンもしゃくり始めて停止しました。革ジャンパーを着た乗り手の若い男は車を降りて、ぼう然として立ったまま青い光を見つめていました。彼はものも言わず、私の方を見もしません。私の頭はガンガン鳴り始め、頭のまわりをバンドでしめつけられたような感じがしました。懸命に努力してなんとか体を動かすことのできた私はバイクをつかんで始動させようとしました。道路そいに押して行ったら突然エンジンがかかってホッとしました。すぐ飛び乗った私はあのいやな、苦しい青い光からできるだけ早く遠ざかろうと思いきり飛ばしました。道路を全速で走りながらも、物体は道路ぎわの高い生垣のつらなりに遮蔽されましたが、なおも夜空に青い光をしばらく見ることができました。

午前二時近くに家に着いてから病身の母親を起こしました。深夜に母を起こすことはかつてないことですが、先の体験で私は極端に恐怖していましたので、そのことをだれかに話さずにはいられなかったのです。

翌日、私の髪の毛と衣服は異様にヒビ割れた状態になっていることに気づきました。電気を帯びたように見えます。

数日後私はこの体験をウィックから北西五マイルのシュラブエンドに住んでいる一友人に話しましたら、彼の話では、同じ時刻に犬がほえ始めたので、外へ出してやろうとドアーを開いたら、大きな青い光が頭上を急速に通過して、北西の方向へ飛んで行ったということでした」



ランゲンホーの円盤

メキシコの怪奇な目撃報告

円盤の目撃報告が依然としてメキシコの新聞社、ラジオ、テレビ局などに流れ込んでおり、ときには身の毛のよだつような怪奇な〝大気圏外から来た訪問者〟の目撃物語がオマケとしてついている。

ここに述べるのもその一つ。身長十フィート、輝く赤い目をして、鼻も口もない〝人間〟の一団を、メキシコ市の南部郊外を散歩中の三人の婦人が目撃したという。

この化け物たちはきらめく灰色の服と長グツを着けていて、マンガに出てくる宇宙人のような格好をしていた。

記者団とインタヴューした婦人たちは、最初は恐ろしくて逃げ出したが、結局勇気を出して元の場所へ引き返したところ、その〝生きもの〟はすでにいなくなっていたと語った。

空中を飛ぶ光る物体の目撃報告がこの〝訪問〟と関係があるようだ。ほとんどが夜間に目撃される未確認飛行体の報告によれば、これは赤色の光を帯びた円盤型から、ちらつくような光を発する回転コマのような型に至るまで種々のものがある。なかには空中に停止するのもあるし、あるいは航空機よりもはるかに早く超高速で動くのもあるし、複雑な旋回運動をするのもある。

或る夕方、メキシコ市の美術館のドームや尖塔のまわりを二つの物体がジグザグに飛ぶのを十二人が目撃した。断続的なせん光を放つこの巨大な輝く物体は、しまいには垂直運動に移って上昇し、ついに小さな点となって消えた。

この報告で氏名を明らかにした五名のうちの二人は次のように主張している。「われわれはこの話をでっちあげたのではないし、酔っぱらっていたのでもない。だが、どんなふうに説明してよいかよくわからない」外国から来た一外交官がこの目撃者中に加わっているのだが、彼は氏名を明らかにすることをこばんだ。

メキシコ湾付近のハラパやヴィリャ・エルモサから、更にまたメキシコ市から三十マイル離れたテポトスランからも目撃報告が来ているが、それらによると、青い光を放つバスケットボール大の物体が着陸しかけてから再び上昇したり、空中に停止した物体がその表面のすき間から黄青色やオレンジ色の光を放ったり、ネコの目のような輝く目付の黒い服を着た人間が、光る金属棒を手にしていたというような例がある。この〝人間〟はハラパの街路で一記者・二名のタクシー運転手、一闘牛士によって目撃された直後、突然消滅してしまった。一方これに負けじとばかり、メキシコ市のタクシー運転手が夜明け前に一機の円盤を見たと報告した。この円盤は回転しながら色光が変化したが、市の上空を西から東へゆっくりと飛び去った。

メキシコ市の空港管制塔の係員（複数）の話によると、彼らはその朝〝きわめてきれいな輝く星〟を見たという。これに続いて円盤の劇的な光景が展開し、そのため独立祭でにぎわっていた同市の目抜き通りは一時間にわたって大混乱をひき起こした。空を見上げて大騒ぎしている群集のために自動車はみな停止して警笛をやかましく鳴らしたが、群集は目もくれずに騒ぎたてるだけだ

った。

無数の自動車がひしめきあっているあいだ、興奮した群集は首を伸ばして、晴れた夕空に無音のまま停止している六機の円盤を見上げていたが、円盤はやがてすさまじいスピードで上昇して行った。

これと同時に西方の郊外地区上空に一個の輝く物体が断続的な光を放ちながら三十分間無音のまま停止していたが、そのうち奇妙な消滅をしてしまった。

メキシコ市で円盤目撃があたりまえのことになってから空港の係員がUFOを見たと初めて発表した。空港の監督官ホセ・ルイス・エンリケの話では、彼は双眼鏡で二個の輝く物体を観察したという。一個は直線コースを移動したが、日没後や日の出前にはしばしば多数の人工衛星が飛ぶのが見られると語った。だが二番目の物体はコースを変えて加速し、消えたが、別な方向に再び現われた。これについて正体を説明することは避けた。

同市の西方にあるタクバヤ天文台台長イグナシオ・エリアス博士はこれらの円盤目撃を〝単なる幻想〟だと片付けた。定期的に同天文台から打ち上げられる気象観測気球を見たのだろうという。しかし、毎日日没二時間前に打ち上げられる気球が、六五年夏の円盤騒ぎ以前になぜ騒動の原因にならなかったかは説明しなかったし、風のまにまにただよう二個の機械箱をぶらさげた気球がなぜすさまじいスピードを出すのかも説明しなかった。（レジスター紙、一九六五年十月二十日付）

メキシコの円盤騒ぎ

一九六五年の夏はメキシコ史上空前の〝空飛ぶ円盤の夏〟として記録された。南米各地で円盤目撃がひとしきり続いたあと、こんどはメキシコでそれが始まった。あたかも全メキシコ人が輝く円盤、停止した光体、高速で飛ぶ光球などを見たかのような現象が起こったのである。どこそこの農家の家族が日中に円盤を見ておびえたとか、夜中に或る町の全市民がUFOを見たとかいう記事がメキシコの新聞に出ない日はないほどであった。ときとして一団の円盤群が葉巻型の大母船に集結したこともあった。（注。このロイター電が〝葉巻型の母船〟という語を使用している点は興味深い）

或るメキシコ市の新聞はこの円盤現象を〝二十三年間続いたナゾ〟と言っている。一九四二年に目撃が始まったからだ。別な新聞は「そんなことはない。メキシコの天文学者ホセ・ボニリャ博士は一八八二年に望遠鏡の前方を通過した数百のタマゴ型物体を観察した」と述べている。

円盤目撃熱がメキシコの首都に満ちてからというものは、まじめな勤め人たちが双眼鏡を手にして各自の事務所の屋根に昇っている光景が見られた。或る大きなデパートは次のような広告を出した。「円盤の存在を信じない人はご自分の目でたしかめて下さい。観測用の望遠鏡や双眼鏡はぜひ当店で！」

空飛ぶ円盤は赤、白、青、黄、灰色などの光を放つ。また大きさは野球ボール大から六十フィートの円盤型に及んでいて、空中を無音で飛ぶが、ときには耳をろうするような轟音を発するか、スパークの雨を放つこともある。キノコ型もあればフットボール型もあり、ドーナツ型やタマゴ型もある。太平洋岸のアカプルコで見られたし、メキシコ湾のヴェラクルス、ずっと北西部のティファナ、ユカタン半島のメリダなどでも観測された。

九月十六日には首都の大通りで約二時間も大混乱が発生した。無数の車がとまって運転者たちは身をのり出して大群集と共に、上空に停止している六機の輝く円盤を一せいに見つめたのである。この日はメキシコの独立記念日で、夜空は花火などでいろどられていたが、円盤を信じない人でも「あれは花火とはちがう」と断言した。

報告類は次第に怪奇なものになってゆく—。

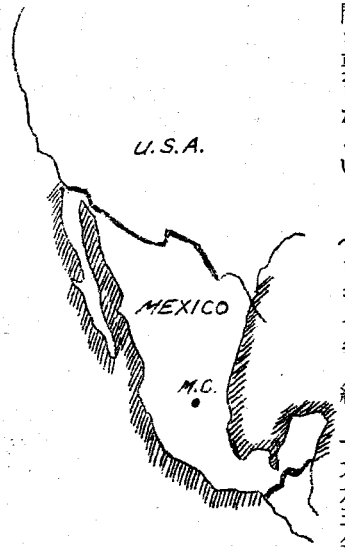
三名の学生が誠意をこめて宣誓したところによると、かねてからテレパシーによってコンタクトしていた背の高い宇宙人たちにつれられて彼らは木星の第三衛星まで三時間の宇宙旅行をしたという。また三名の婦人は宇宙服を着た十フィートもある二人の〝人間〟に出会って逃げ出したし、或る家族が乗っていた車は一個のタマゴ型の物体によって三十五マイルも追跡されたが、やがて目もくらむようなスピードで夜空に上昇して行った。

一方これについてメキシコ湾気象局局長エルネスト・ドミンゲス博士は、人々は人工衛星や観測気球を見たのだと主張したし、或る原子物理学者はメキシコ市での講演で、円盤目撃のすべては観測気球か何かの見誤りによるものだと片付けた。「すべてはサギ的な空想の産物とみなすことができる」という。

しかし国立天文台の物理学者ヘヴィエル・ガルソン氏は次のように言明している。「円盤はたしかに存在する。しかもこれは明らかに他の惑星から来るものだ」

九月二十五日と二十九日にメキシコ市の上空で別な円盤群が出現した。夕刊紙の〝ウルティマス・ノティシアス〟は、円盤が存在する証拠はいまや驚くべきものとなりつつあると書いた。しかし朝刊紙の〝エクセルシォール〟は、幻影を見たり、それを円盤と感違いしたりするような、生理学的に変な人間が多いのはどうしたわけかと反問している。

円盤熱の絶頂は「十月一日午前九時にメキシコ市の上空を金星から来た三千機の円盤が飛ぶ」と看板描きのクレメンテ・ゴンサレス・インファンテが予言したときに来た。しかし円盤は出現しなかったし、記者団が彼に会いに行ったときも本人は現われなかった。だがこの予言によって円盤の大パレードを見ようと記念碑広場に集まった約二千人の大群集を警官や消防隊が追っぱらうのに二時間を要したという。（レジスター紙、一九六五年十一月三日付）



シベリアの不思議な大爆発

C・A・ハニー

最近多数の新聞が一九〇八年に北部シベリアで発生した大爆発事件に関する記事を掲げています。これについては部分的に確証された或る新しい説によって、反物質的な流星と大地との衝突が原因であることが判明したと述べています。

他の各新聞も同様の記事を掲げて、流星が地面に撃突したのが原因だと書いています。しかしこれらの説はみな正しくありません。真相は次第に判明してきているのであって、真実を究明しようというあらゆる種類の努力が払われています。

この事件について私が入手している情報によれば、一機ないし二機の宇宙船が関係しています。最近この地域を調査した科学者団が発見したところでは、私の情報が正しいことを確証しているように思われます。ひとつこの事件をふり返って全貌を明るみに出すことにしましょう。この大爆発は北緯六十一度、東経百二度の、事件から十九年後までは科学者が訪れなかった荒涼たる地域で発生しました。

この爆発の力を現代の核兵器と比較すれば、三十メガトンの水爆と同じほどの力を持つものであるといえるでしょう。爆心地から半径二十マイル以内のあらゆる樹木は吹き倒され、いまなお横たわったままになっています。この爆発の目撃者がいます。爆心地から四十マイル離れた地区に住んでいた農夫で、その名はS・B・ヴァナヴァラといい、大爆発が発生したときには自宅の前にすわっていました。彼が当局に報告したところによれば、着ていたシャツは殆ど焦げてしまい、一個の巨大な火球が見えたということです。この爆発のために爆心地からかなり遠方まで各所に火災を起こしたことが後の調査でわかり、右の農夫の証言の正しかったことは或る程度確証されました。

その後長いあいだ研究家が流星の破片を求めてその地域を探索しましたが、何も発見できませんでした。しかし金属の破片が見つかったのです。これはその地域で何か人工的な物が爆発したことを示しているようでした。

一九五八年にその地域を調査したソ連の探険隊は現場に異常な放射能があることを報告しました。また長年にわたってその地域の原住民が現在のような原子力時代の到来前に、不思議な病気がもとで死んでいますが、これは放射能を浴びて死んだのであることが判明しました。人工の金属片や放射能地帯を調査したソ連の科学者は「爆発した物体は〝おそらく〟遠い惑星から来たものであろう。あるいは宇宙船が爆発したのかもしれない」と声明しています。

しかし他の科学者はこの考えが〝空想的〟であるとし、いかがわしい資料に基づいたものと反駁しています。ゆえにこうした例によくあるように、現場を調査した科学者団は調査をしなかった科学者から大体に信用されないということがわかります。調査結果が〝空想的〟であるというだけで葬り去られるのです。

多年の調査研究の後、爆発の残骸と思われるイン石の破片が見

つからなかったことから、結局反物質的なイン石が原因であったのだろうということになってしまいました。というのは、反物質ならば痕跡を残さないからです。かかる憶測はバカげているのであって、およそ科学者たるの資格はありません。証拠がないからというので反物質の存在に関する確証されない説をでっちあげてよいものでしょうか。ばかばかしい！

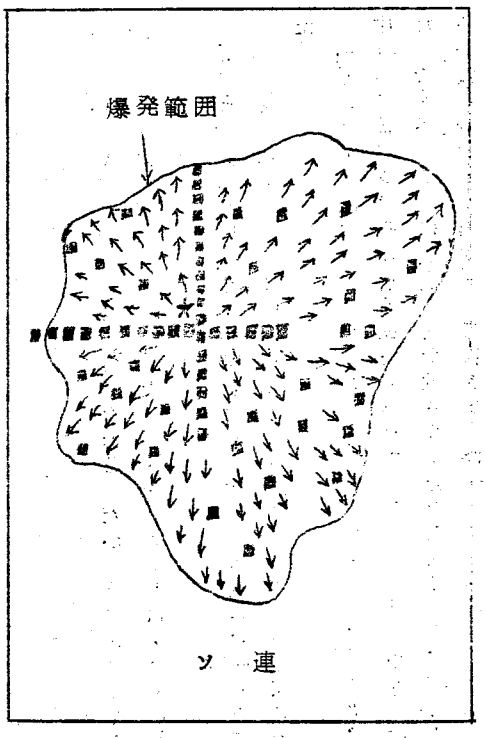
また他の科学者は現場で発見された放射能を現代の核爆発によってひき起こされた結果だと片付けています。もしそうだとするならば、放射能を浴びたためであるというむかしの死者をどのように説明しようというのでしょう。なぜ放射能が約九百平方マイルの地域だけに集中して他の地域に集中しなかったのでしょう。多数の円盤報告の場合と同様に、科学者の説明は必ずしも既成の事実と一致するものではありません。

この爆発が空中の少なくとも一マイルないし三マイルの高度で発生したということは確実に証明されています。生き残った樹木の枝はひどく傷つけられていて、特に樹木の先端は焦げていますが下部のあたりは無傷です。

次の図はトゥングースカの爆発地帯を示すもので、バイカル湖の北方五百マイルの地点です。これは一九六一年にここを調査したソ連の探検隊の調査結果に基づくものです。小さな矢印は樹木が倒れた方向を示します。

爆発地外周の地域では樹木の生長が促進されたことが判明しました。図中の小さな黒い四角点は調査によって土地が肥沃になった地点を示しています。

真相は一体何であったのか？　爆発は地上一ないし三マイルで発生したのであって、他の惑星から来た一機ないしそれ以上の宇宙船の原子炉の爆発であったと思われます。私の考えでは、一機が故障を起こしたために救援に来た別な一機が爆発を起こして、こっぱみじんになったのでしょう。爆発前の〝死の急降下〟はフランスの天文学者連によって観測されていますし、爆発から生じた無数の破片は二ヵ月にわたって異常な〝白夜〟を現出せしめました。このためヨーロッパの或る地域では真夜中に新聞を読むことができたほどです。現代の科学者はこれをスイ星の尾のせいにし、これが〝トゥングースカのスイ星〟と称されるようになりましたが、この件に関しては新しい証拠が日毎に明るみに出ていますので、これが人工の宇宙船と関係があったのであって、単にスイ星やイン石の落下とは異なるものであることがいずれ判明するでしょう。



モスクワ郊外に現われた

奇妙な人物

今から二十年以上も前のこと、モスクワ近郊トウシノのチュカロフ記念ソ連中央航空クラブに非常に不思議な人物が訪れたことが、ソ連の天文学者アレクサンドル・カザンツェフによって伝えられている。ここにそれを記してみよう。

カザンツェフが航空クラブから家に帰ろうとしているとき、まるでだれかに会うような感じを受けて、帰宅をためらっていた。するとそのとき一人の男が近づいて来た。その男の歩き方に彼は何か異様なものを感じた。その感じは、その男—異人—が近づくにしたがって強まった。異人は頭が大きく、背が低く、眼鏡をかけていた。頭には一本の毛も生えていなかった。

カザンツェフが驚いたのは、その異人の目が、相手を見抜き、すべてを理解しているような、大きな、賢そうな、悲しそうな目であることだった。彼は異人をクラブに招き入れ、イスにすわるようすすめた。異人は分厚い書類を机に置いて、おだやかに微笑して彼を見つめ、彼の目の中に軽い驚きがあるのを見てとり。彼の気持を感受したらしく、彼が言葉に出して問いもせぬうちにこう答えた。

「違います。これは文学の相談のためなどではありません。私はあなたに将来役立つことをお話に来たのです」

不可解にも異人は彼の考えを見抜き、自分は宇宙飛行士にでも地質学者でも医者でも技師にでもなれるのだが、そのどれでもない。ただ自分の故郷火星に帰るため、宇宙ロケットに乗せてほしい、と言った。

彼はその異人を狂人だと心に思った。その瞬間異人は「そうです。精神病院にいました」と答えた。異人は書類を指さして言った。

「私はロシア語、英語、フランス語、オランダ語、ドイツ語、中国語、日本語、その他地球で使われているどの言葉ででも書けたのですが、これは表現力と柔軟さをもたせる必要から、非常に古い賢い種族の言語を使って書きました」

書類には不思議な記号がこまかく書き込んであった。彼は顔をしかめ、狂人のたわごとではないかと疑ったのである。「でも、どうしてこれが読めます？」彼はいらいらした。

その瞬間、異人の目におだやかな同情の気持が見えた。「この若い惑星—地球—には脳にかわる機械が発明されたでしょう」と異人が答えた。

「それでは電子計算機でこれを解読できるというのですか」彼は言った。

「そうです。それにだれが書いたかもわかりますよ」彼は異常さに手がふるえた。しかし、異人の、意志を伝えたり、読んだりする目には偽りの色を感ずることができなかった。異人は半年後再会することを約束して別れた。

その対面の直後、高名な数学者が訪ねてきた。この学者は十六才で大学に入り、二十才で博士候補になり、二十八才でアカデミー会員に選出された天才であった。この数学者が電子計算機のこ

とを話し、翻訳すらできるサイバネティックスの機械についても話した。そのとき彼はこの数学者に不思議な会見のことを話し、解読を頼んだのである。そして電子計算機によってまもなく解読に成功した。その結果はほぼ次のようなものであった。

「これは日記である。一九〇八年に悲劇的な事件が起きた。火星人たちの搭乗していた宇宙船がトゥングースカ密林に落ちてきて爆発したのである（注。前掲記事〝シベリアの不思議な大爆発〟参照）そのときの生き残り乗員が日記を書いた。火星―亡びゆく砂漠の世界―の人間は、地球の人間が自分たちに似ていることを記した。火星人は地球人のような発声方法で自分がだれであるかを知らせようと努力した。ところが、シベリアの商人と巡査は彼―火星人―を狂人と思って精神病院に収容してしまったのである。半世紀間、火星人は地球人と共同生活を続けつつ毎日日記を書き続けた。火星の民は太古の賢明な種族であって、地球の発展段階をとうの昔に経過してきており、ウソ偽り、偽善、ネコかむりなどの地球的人間関係をもっていない。火星人（異人）は火星の民よりはるかにうまくやってのけ、精力的である地球人が、いつか自分を、あの厳しいがなつかしい火星に送り返してくれるだろうと期待している」

囚われし人にとりては、真実とは〝物象の影〟以外に
何の意味もなかるべし

――プラトー〝レパブリク七巻〟――

科学者の見た金星

―金星には生命がある？

（ワシントン発UPI）最近科学者（複数）は金星は全然死の世界ではないと宣言している。金星は夜空に優美に輝いている星である。太陽と月を除けば天空で最も明るく輝く天体である。一説によれば一九六五年前の或る機会に東方で異常に輝いて或る旅行者たちの道を照らしたという。

それはともかくとして、三年前の一九六二年の十二月十四日に、人工惑星のマリナー二号が金星から二万一千マイルの距離を通過して少し不気味な報告を送り返してきた。その要点は、美しいけれども金星には疑いもなく生命はないということであった。マリナーの電波係によれば、金星の表面温度は華氏八〇〇度で、それは亜鉛の融点よりも高温である。これは以前に地上の電波望遠鏡で得られた資料、すなわち金星の厚い雲で覆われた層の下部は高温すぎて如何なる想像し得る種類の生命の存在も不可能であるという結論を支持するように思われた。

ところがマリナー二号の報告から数年たって科学者は金星の表面温度を六〇〇度ないし七〇〇度に下げてきた。そして科学者の多くは電波による測定の信用度に疑惑を投げているのである。

ロサンジェルスのケアリフォーニア大学の天体物理学者ゴードン・J・F・マクドナルド博士が上院宇宙問題委員会に証言したところによると、高温説は金星の大気中に発生する電子の放射の

ための誤った解釈かもしれないという。彼と、ダラスの高等研究所南西部センターのロイド・V・バークナー博士及びプリンストン大学のハリー・H・ヘス博士は同委員会にたいする証言で、金星は何かの生命の住家であるかもしれないという説に意見が一致した。

たとえ表面温度が約六〇〇度にしても、生命が芽生えて濃密な大気の冷たい部分で繁殖しているかもしれないとヘスは言った。「結局この地球上でも魚や多種類のプランクトン、ほ乳動物さえも海中で生きているが、それと同様だ」という。

先月、海軍研究所のハーバート・フリードマン博士は〝宇宙飛行と航空〟誌に、最近金星は美しいばかりでなく生きた惑星であるかもしれないという主張に自分の意見を加えて次のような記事を書いた。「金星の雲層の上層部付近の状態は生きた分子の発達にとって適当である」彼は続ける。「金星には手頃な温度をもつ高い山脈がある可能性がある。真際、電波天文学者は最近の電波観測から、二つの巨大な山脈が交差していて、一つはロッキー山ほどの長さがあり、他の一つはもっと長いことを推測している」

十一月十二日と十一月十六日にソ連が発射した二個の金星ロケットは二月に金星を通過することになっている。このロケットの発見によって金星の表面温度のナゾが解決するかもしれない。一方、それも電波を利用するので混乱が起こることも考えられる。米航空宇宙局の高い地位にある一科学者がUPI記者に語ったところによると、電波という方法が信頼すべき解答を与えるとは考えられないという。「われわれは実際に金星へ行って温度計を使用しない限り真の温度はわかりはしない」と述べた。

米国の俳優、円盤の乗員とコンタクト

〔ハリウッド発一九六五年十二月二十日（UPI）〕（ヴァーノン・スコット記）米国の俳優スチュアート・ホイットマンが空飛ぶ円盤に乗った小さな緑色の人間たちと話した！これは冗談ではない。ホイットマンが誓って語るところによると、先月発生したニューヨークの大停電中に円盤（複数）が彼のホテルの窓の所へやって来て、円盤の乗員と話し合ったが、そのとき乗員はこの大停電をひき起こした原因は自分たちにあると語ったという。

ホイットマンはまじめな人で、夜明けちょっと前に完全に冷静になっていたとき円盤が飛来した。

「ホテルの十二階にある私の室の窓の外をホィッパーウィル（注。北米産のヨタカの類）の鳴き声のような音がするのを聞きました。円盤の一つはオレンジ色で他の一つは青色でした。二つ共異常な螢光を発していますので、窓がついているのか、中に人間がいるのかはわかりません。すると中の人間がちょうど拡声器を使用しているような声で私に話しかけてくるのが聞こえます。その言葉は英語でした。それは他人には聞こえなかったかもしれません。たぶん私が彼らの波長に同調していたからでしょう。円盤の乗員が私に話しかけたのは私の心に邪心や憎悪などがないように思われるからだということでした」

私は（筆者は）彼がからかっているのではないかと思って彼の顔をさぐってみたが、相手は全く真剣そのものであった。—それとも気が狂っていたのかもしれない。ホイットマンは円盤映画の宣伝をやっているのではなかった。また彼は円盤目撃を売り物にし

てタダ酒にありつけるような有名人になろうという気持もなかった。彼は話を続ける。

「乗員たちは地球を恐れているということでした。これは地球人が或る〝物〟でもってよけいな事をやっているために地球または宇宙のバランスを破るかもしれないからです」ホイットマンの顔は信ずる者の熱心さで輝いていた。

「あの大停電は彼らの力を示すためのちょっとしたデモンストレイシュンにすぎず、必要とあらばもっと多くの物事が簡単にやれるのだと乗員は語りました。それは警告として役立つのだそうです。全地球上の機能を停止させることもできると語っていました」

これにはホイットマンも少々とまどったけれども、この小さな緑色の人間たちと友好的に話し続けることを望んだ。

「彼らは私が地球上に存在する邪悪、偏見、憎悪などと戦うべく、できるだけの事をやるようにと言い残して飛び立って行きました。円盤の大きさについてはよくわかりませんが、それらが飛び去ったとき、私は意気揚々たる感じがしました。心中にショックさえ受けませんでした。決して眠って夢を見たのではありません。私は窓のところに立っていて、コンタクトのあいだずっとハッキリと目を大きくあけていたからです。

彼らが私をコンタクトの相手に選んだ理由はわかりませんが、神に誓って言えるのは、彼らはたしかに窓の外にいて、私に話しかけたということです」

この次もしワナを持った白い服を着た小さな地球人とコンタクトしたら気をつけろと私はホイットマンに忠告した。

生と死の谷間

先般発生した全日空機の大惨事の直前、テレパシックな予感によって乗らなかったために助かったという人が数名いるようです。そこでここではテレパシー研究家として有名な米国デューク大学超心理学教授J・B・ライン博士が集めた事例のうちテレパシーと思われる実例を少しあげてみます。

(1)若い婦人が夢を見た。夢では彼女の兄が一通の電報を手にして沈みかけている船のトモに立っていた。彼の周囲には泣きながら立っている親類が数人いる。その船の名は〝アンダスン〟であった。―以上彼女の夢―

まもなく彼女は兄の乗組んでいた油槽船リパブリック号が魚雷の攻撃を受けて兄が死んだという電信を受け取った。更に詳細を調べてみると、その船の船長の名がアンダスンであることがわかった。

(2)英国人ウィリアム・T・ステッドは一九一二年、渡米に先立ち親友のトウディル師に再会を約していた。一九一二年四月八日の晩、トウディル一家は午後十一時に就寝した。女中のアイダとマーサは子供たちと一緒に育児室で寝ていた。・・・まもなく育児室の外側の廊下や上り段のあたりから発する号泣の声を二人の女中は聞いた。よほど沢山の人が大悲惨事に遭遇したらしい様子だと二人は感じた。それは約十分間あるいはそれ以上続いてやんで

しまった。一方トウディルの妻は彼のところにかけ寄って言った。

「まつ毛の濃い、アゴや顔の周囲にヒゲの生えている一人の男が今台所を通り抜けた。衣服は灰色がかったツイードのもので、上に短い書斎外套を着けていた。それからまもなく群集の怒号の声が聞こえた。うめき声さえまじっていて、どうしても多数の人が何かの大惨事に遭遇しているとしか思えない。声は家の中から聞こえるが、見当がつかなかった」

翌朝、ステッドの乗った旅客船タイタニック号が沈没したニューズをトウディル一家は受けた。時差を勘定に入れると、タイタニック号が氷山と衝突したのは四月十四日午後十一時三十五分で、沈没したのは十五日の午前二時二十分であった。トウディル家の女中が号泣の声を聞いたのが八日の午後十一時半頃、彼の妻が号泣の声を聞き、かつ人の姿を見たのが十五日の午前一時半頃であった。後日トウディルが妻にステッドの写真を見せると、彼女の見た人の姿はそれと酷似しており、その服装もステッドが平素着用したものであったという。タイタニック号の生存者たちは次のように語っている。

「そのとき我々の耳を打った騒音は、人間界で聞かれた最も物すごいものであった。千六百の人間が死の海に没入したときに振り絞った悲絶哀絶の苦悶の合奏は、陰々と墨を流した闇空をつんざいて高く響いた。命かぎり根かぎりのたうちまわる瀕死の人間の群から起こる悲鳴と絶叫は実に一時間にわたって続いた。我々生存者はその気味悪い断末魔の叫びからのがれたいばかりに腕のつづく限り漕いだ。あのときのものすごい悲鳴はおそらく終生我々の耳につきまとうであろう・・・」

タイタニック号のサザンプトン出港は四月十日のことであった。したがって八日夜に女中の聞いた声は事前のものであり、夫人が十五日に聞いた声は事後のものである。しかし事件と時刻は一致している。正夢と対応する看過しがたい〝幻〟であったといえる。

(3)一人の男が或る晩着がえをしている最中、その父が油でよごれた作業ズボンをはいて悲しげな顔つきで寝室に入って来た。「お父さん！」と男は叫んで手をさしのべた。父は固い握手をかわすや否や、かき消すように姿を消した。

そのときベルが鳴ったので若者はあわてて階段をかけおりた。戸口にはメッセンジャーボーイが立っていたが、彼が渡した電報は、数百マイル離れた所で、彼の父が自動車修理工場で作業中に死んだという知らせであった。

(4)フランス生まれの銀行家が或る夜何心なくウィラギャザー（注。一九四七年没の米国の女流作家）の小説〝大司教の最後〟を取り上げた。一度読んだことのある書物なので、手あたり次第にページをあけたところ、老人の死を描いた章にでくわした。前にこの小説を読んだときは、この場面で殊更に感情をかき乱されることはなかった。が今彼は目に涙を浮かべ、やがてすすり泣き始めた。そこで気づいたのは、彼がおとなになってから涙を流して泣いたのは今なお父が生きているフランスで母が死亡したときだけだということだった。それで彼は次のように考えた。「成人してから泣いたのは母の死のときだけだった。それで今泣くというのは父の死以外にあり得ない。」翌日彼は父が死んだこと—例の小説を読んでいた時刻に—を知らせる電報を受け取った。

ニューイングランドの重要な目撃事件

ダン・ロイド

ニューイングランドのこの異常な目撃事件は一九六五年九月三日にニューハンプシャー州エクセター付近で発生した。

その日午前十二時三十分頃にエクセター警察署の警官ユージン・バートランドは、エクセターとハンプトン間バイパス上に駐車していた一婦人のほうへ近寄った。この女が興奮して語るところによると、輝く赤色を帯びた一個の飛ぶ物体によって一〇一号路線を十二マイルものあいだ追跡されたというのである。その物体は彼女の車をめがけて数度急降下した。

この事件後約三十分してから、エクセターの郊外二マイルばかりの一五〇号路線を、十八才のノーマン・ムスカレロが町の方へ行くどれかの車に便乗させてもらおうと思いながら歩いていた。突然彼は少なくとも四つのものすごくきらめく赤色の明滅する光を放つ一個の物体が付近の森から飛び出て、あたりの野原の上空を飛ぶのを見てびっくりした。それはクライド・ラッセル氏の家の上空で停止したが、恐れたノーマンが野原との境目の石垣のうしろへしゃがみこんだため、物体は彼の方へ近寄って来るように思われた。物体の光があまりに強烈なのでラッセルの家は赤色光で照らされた。その物体の長さは八十ないし九十フィートあり—これはラッセルの家よりもうんと長い—、完全に無音であった。ムスカレロはラッセル家の人々を起こそうとしてドアーをどんどんたたいたが、この少年が酔っぱらっているものと思った家人はドアーをあけようとはしなかった。ついにあきらめたムスカレロは通りかかった車をとめてエクセター警察署へ急行した。

午前一時四十五分頃にムスカレロは内勤警官のレジナルド・タウランドに事件を報告したが、恐怖のためにまっさおになり、口もろくにきけない有様である。バートランド警官が署へ呼びもどされて、ムスカレロを車に乗せ、現場へ引き返したが、物体はどこにも見当らなかった。そこでバートランドは一緒に野原を探してみることにして、彼がライトをあちこち照らしていたとき、ムスカレロは近くの樹木のうしろから例の物体がゆっくりと上昇するのを見た。「出たぞ—ッ!」と彼が大声で叫ぶと、バートランドは振り向いて、一個の大きな黒い物体が、一列にならんだ四つのものすごくきらめく赤い明滅する光を放ちながら、樹木くらいの高さで野原へ入って行くのが見えた。すると物体は七十フィートの高さの樹木を越えて、二人から百フィート以内に近づいて来た。本能的にバートランドは腰の拳銃に手をのばしたが、車に乗るほうがよいと考えて、ムスカレロに車中へ退避せよとどなった。二人は車へ走り込み、バートランドはただちに無電で本部へ連絡して援助を求めた。デイヴィッド・R・ハント警官が数分以内に到着して、三名は物体が樹木のむこうへ去って行くのを見守った。

警官バートランドとノーマン・ムスカレロが物体を見たのは大体に約十分間で、ハント警官が来てから目撃したのは五分間ばかりである。

強弱に変化する四つの赤色光は、規則正しく順次に左から右へ、

左から右へときらめいたようであった。パートランドの話では、その光は見たこともない強烈な光で、その光度はわずか数ヤードの距離で顔面に直射するときの車のヘッドライトに似たようなものだという。光が強弱に変化した様子からみれば、これは人間の手で建造された乗物で、絶対に自然現象ではないという印象をパートランドは受けたという。各光は大きな黒い固体の一部として見え、その反射光のためにカサ現象（注。太陽、月などに起こる）を起こしていた。

接近してきたときでも音は聞こえなかったが、付近の納屋にいた動物たちは明らかに何か恐怖すべき物を感じた。いないて小屋をけったりしたからだ。一匹の犬は激しくほえたてた。警察の巡回自動車の無電装置にはべつに故障が起こらなかったし、電気系統にも影響はなかった。野原には焦げた跡もくぼみもなかった。

この事件に関連して、氏名不詳の興奮した一人の男がその朝早くUFOの目撃を報告するために警察へ電話をかけようとしていた。彼は交換手に「円盤から追いかけられたので警察へつないでくれ」と興奮して頼んだ。しかしつながらないうちに電話はだめになってしまった。男も電話ボックスもその後UFOに追跡されたわけではなかったのに—。

警察がこの事件をニューハンプシャー州ポーツマスのピース空軍基地へ報告したあと、一少佐と中尉が軍服のままでやって来た。彼らは警官たちに尋問して現場へ連行した。激しい質問の後、地方人に恐怖心を起こさせるのを避けるために目撃事件に関しては新聞社に知らせないようにと申し渡された。だが遅すぎた。数名の記者がすでにこの事件をかぎつけたからである。確証されない一記事によれば、空軍の一将校がその後エクセター市内の新聞を売っている店をすべて巡回して、詳細な記事を載せたマンチェスターの〝ユニオン・リーダー〟紙のコピーをすべて買ったという。警官に質問する際に空軍将校は特に物体の大きさや形に関心を寄せた。

（12ページより）

ます。また或るコンタクティーが、円盤は地球内部の中心部から出てくるのだと教えられたと称するならば、やはり私はそれを虚偽とみなします。個々のコンタクト物語において少々の相違はあっても主要点は一致すべきです。

また円盤が四次元の世界の中に消滅したという人もあります。この人の話は真実かインチキのどちらかです。真実とすれば、円盤の推進原理を知っていなかったために、円盤が消滅したのだと誤って考えたのでしょう。ゆえに、あらゆる角度からの観点が考慮されるべきで、また地球人の知識の限界をも考えるべきです。かつて人々は円盤は宇宙空間の生きた有機物であるとか、別な次元から来るとか、テレポートされるのだなどと考えたものです。これはすべて地球人側の無知によるもので、惑星人側の無知のせいではありません。

問　右の質問に関連して、惑星人はあなたが信じられないような事を言ったことがありますか。

答　ありません。しかし私が—当時は—受け入れられなかった事を彼らが言ったことはあります。しかし後に私が知識において少し進歩してから彼らの情報が正しかったことがわかりました。

ローマでのアダムスキー

ルウ・ツィンスシュターク

筆者ルウ・ツィンスシュターク女史はスイスGAPのリーダーとして、またヨーロッパきっての女流円盤研究家として多年活躍してきた人で、彼女の論説はしばしば英国の円盤研究誌〝フライイング・ソーサー・レヴュー〟誌に掲載された。一九六三年にアダムスキーがヴァティカンを訪問したときはこれに同行して、彼が宮殿に入るのを目撃した。これについては英国のデスモンド・レズリーが書いた記事を本誌前号に掲載したが、ルウの記事は更に詳細に当時の様子を伝えていて興味深い。　—編者

ジョージ・アダムスキーの死去とデスモンド・レズリーによる追憶の記事で、私は一九六三年の五月から六月にかけてローマでアダムスキー氏と共にすごした最後の数日のことを思い出しました。氏はすでに亡くなりましたので、当時起こった出来事をお話してもよろしいかと思います。読者はきっと興味をもたれるでしょう。

私は一九五九年に一度ジョージのお伴をしてローマへ行ったことがあります。そのとき法王ピオに個人的に会いたいという切なる願いを彼が持っていたことを今でもおぼえていますが、この志は達成されませんでした。ですから一九六三年の場合もおそらく失望することになるのではないかと思っていました。彼はアントワープのメイ・モーレー夫人（注。ベルギーGAPのリーダー）と一緒にパーゼルへ到着しましたが（注。パーゼルは筆者ルウの在住地）、彼の心はローマへ飛んでいましたので（注。アダムスキーはヴァティカンで法王と会見することを再度切望した）、メイと私が旅費を出すことにし、もう一度運だめしをやってみることにしました。今度は法王ヨハネ二十三世との会見です。「今度はきっと会ってもらえるだろう。数週間前コペンハーゲンで受け取った個人的なメッセージを法王に渡すことになっているんだ」とジョージは語りました。（注。六三年のヨーロッパ講演旅行の途中、コペンハーゲンで〝或る人物〟から法王宛のメッセージを託された）彼の話では、五月三十一日金曜日の午前十一時にサン・ピエトロ大聖堂の前に行くことになっているというのです。

私たちは予定時刻前に彼をそこへ案内しました。一同が大聖堂へ通じる石段のところへ到着したとき、ジョージはあたりを見廻してすぐに口を開きました。「例の男がいるのが見える。一時間ばかりして帰って来るから同じ場所で持っていてくれ」それからすばやく彼は私たちを離れて歩いて行き、群集のあいだを通り抜けて大聖堂の入口の左手の方へ向かって行きました。私はそのときまで右手を見ていました。スイス人の護衛兵のいる門を通って入ってゆくものとばかり思っていたからです。しかしジョージは左方へ歩いて行くのです。その方向に一枚の木製のドアーがあるのにはじめて気付きました。私たちが立っていた場所から百メー

トルばかりのところです。このドアーは少し開いていて、一人の男がその内側に立っていました。だれかを待っているようです。この男は黒い服を着ていましたが僧服ではありません。胸のところに色のついた光る物があるのが見えました。絹のチョッキの一部のようでもあるし、金属板のような物にも見えます。その色は赤と緑でした。その距離までには多勢の人がいましたが、私はドアーのところの男の様子を見たのです。

メイと私はそのあと大聖堂の中へ入って行き、続いて食堂へ入りました。ジョージがヴァティカン宮殿内部へ入ったからといって実際に法王に会うとは限らないことがわかってはいたものの、二人は心がはずむのをおぼえました。朝刊は法王の健康状態について暗いニューズを載せています。しかしジョージが正面入口以外の別な入口から入ったということは、毎日の訪問者名簿に記載されないことになります。これは面白い、と思いました。

一時間後に私たちは再びジョージに会いました。彼が見えなくなってからのことにすべての興味がかかっていました。彼の表情は喜色満面というところで、茶色の目は宝石のように輝いています。この様子をいつまでも忘れることはできません。「法王に会ったよ」と彼は深い声でゆっくりと、しかも勝ち誇ったように言いました。「法王は私と話した。私はメッセージを渡した。それで法王は私に祝福の言葉を与えてくれた。結局或る物事がうまくいったんだ」

法王との会見そのものは数分間にすぎなかったけれども、そのあとジョージは入口で迎えてくれた例の男とかなりの時間をすごしたということでした。「その人は宇宙人ですか？」と私が尋ねたら「うん、そう思う。少なくともそういう印象を受けた」とジョージは言います。どうも法王の側近であるらしく、信任の秘密顧問のようであり、多くの物事を知っているということです。また法王は新聞社に公表されたような、広場に面した部屋に寝ているのではなく、部屋の窓はヴァティカン庭園（注。宮殿の裏手）に向いていたとも語ります。ジョージは断固たる態度でつけ加えました。「法王は決して瀕死の状態ではない。食べられないからたしかに弱ってはいるけれども、子供のようなきれいな皮膚をしていて、少し赤味がかってさえいる。私は胃ガンで死にかかっている人たちを見たことがあるが、その皮膚はうんと違ったものに見えた。それなのに法王には手術を施そうともしない。手術を受けるのにそんなに年をとっているわけでもないのに—。ハリー・トゥルーマンは八十才のときにこの手術を受けたんだ」

ところがちょうどその夕方ローマの新聞は法王の状態がもち直したことを報じ、血色もよくなったと述べていました。しかし土曜日の朝刊では最悪の事態を伝えました。

さて最初の興奮がおさまってから私は昼食はどうかとジョージに尋ねたら喜んで同意しましたので、一同は或るすてきなレストランへ行きました。ジョージはタマネギ付きのステイクを注文しましたが、給仕たちのだれもこの英語を知らないのです。メイも私もこのイタリア語を思い出せなかったため、彼の意志を通じさせるにはかなりの時間がかかりました。

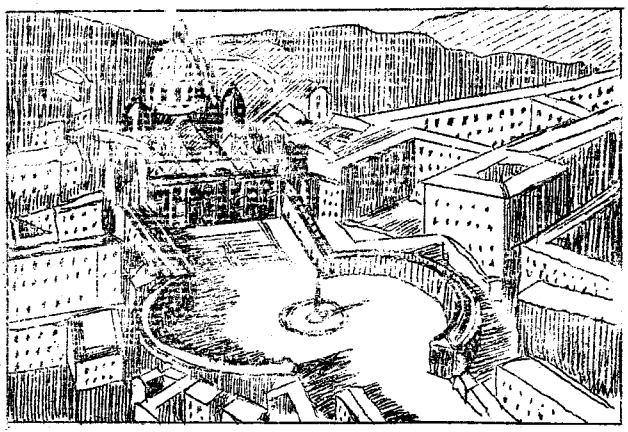
次の日の昼食時です。ジョージは突然胸の内ポケットから一種のプラスティックのケースを取り出しました。たいそう小さくて、透明な覆いの下にきわめて異様な銘があります。それは私がかつ

て見たことのない文字で、ペンで書かれたものでした。たしかにローマ字でもなければゴシックでもなく、ロシア語でもなく、中国語、日本語、アラビア語でもありません。この銘の下部に英語によりローマン・ブロック字体で法王との会見の日付が記されています。

ジョージがこのケースを開いたとき、私たちはうっとりして見つめていました。法王の顔を刻み込んだ世にも美しい黄金のメダルが優美なケースの中に収めてあるのです。それはキリスト教統一促進運動の記念メダルのようにも思われましたが、あるいはもっと古いものであったのかもしれません。手に取ってみてその重量にびっくりしました。たしかに純金か、少なくとも十八カラットはあり、そうでなければ二十二カラットはあります。もともと金細工師の娘ですから私の推測は誤っていないと思います。このメダルは少なくとも二百ないし三百スイスフランの価値があるでしょう。ジョージがそんなものを買うはずはありません。彼は現金を持ち歩かぬ人で、各国の通貨の相違も知ってはいません。また私たちが付き添わないで町の中へ出ることもありません。

次の日にローマの空港で彼と別れたとき、彼はまだ楽しそうな気分にひたっていました。そのときの写真がそれを示しています。これが彼を見る最後だろうという気がしましたが、法王との会見に私が一役果たしたということから私もうれしくなっていました。そしてそのとき初めてジョージ・アダムスキーなる人物がこの世における何かの使者であったのだということが私の胸に響いてきたのでした。もっとも彼は内奥の秘密を決して洩らしてはくれませんでしたが—。

彼が使命を完全に遂行したかどうか、また最後までその特殊な仕事によって見事な劇を演じたかどうかは、私の判断の限りではありません。しかし彼がヨハネ二十三世の死ぬ三日前の一九六三年六月三日月曜日に法王から待ち受けられて対面したことを私は〝知っている〟のです。また彼が語ったように、別な重要な建物で別な重要な会見（複数）が行なわれたと信じてやみません。



ヴァティカン宮殿のサン・ピエトロ大聖堂前の広場

UDへの誘い（いざな）

◎先にお知らせしましたように日本GAPには〝UD〟と称する研究会があり、毎月一回東京都内で会合を開いております。これについてまだよくご存知ない方もあるようですから、あらためて内容をここに記すことにしますので、なるべく多数ご出席下さいますようお願いいたします。

◎UDというのは宇宙研究同好会の略称です。といっても本会とは別個な団体ではなく、日本GAPの別称ですから、いわば本会そのものですが、ただ会合を主体にした研究会であるために一応〝UD〟といっているわけです。

◎この会合を持った理由は次のとおりです。私たちは家にただ一人でこもって静かに読書したり冥想したりすることも大切ですが、ときには多勢の人と直接にコンタクトして話し合いや討論を行なったり意見の交換をしたりすることも重要です。必ずや何か得るところがあるはずです。その意味でこのUDの会合はかなりの成果をあげてまいりました。地方でも行ないたいのですが、目下会長が多忙のためその余裕がなく、当分の間左記の場所を会場としますから都内またはその近辺の方、あるいはたまたま開催日頃に上京された方はふるってご参加下さい。日本GAP会員ならだれでも出席できます。

◎日時　毎月第二日曜日。

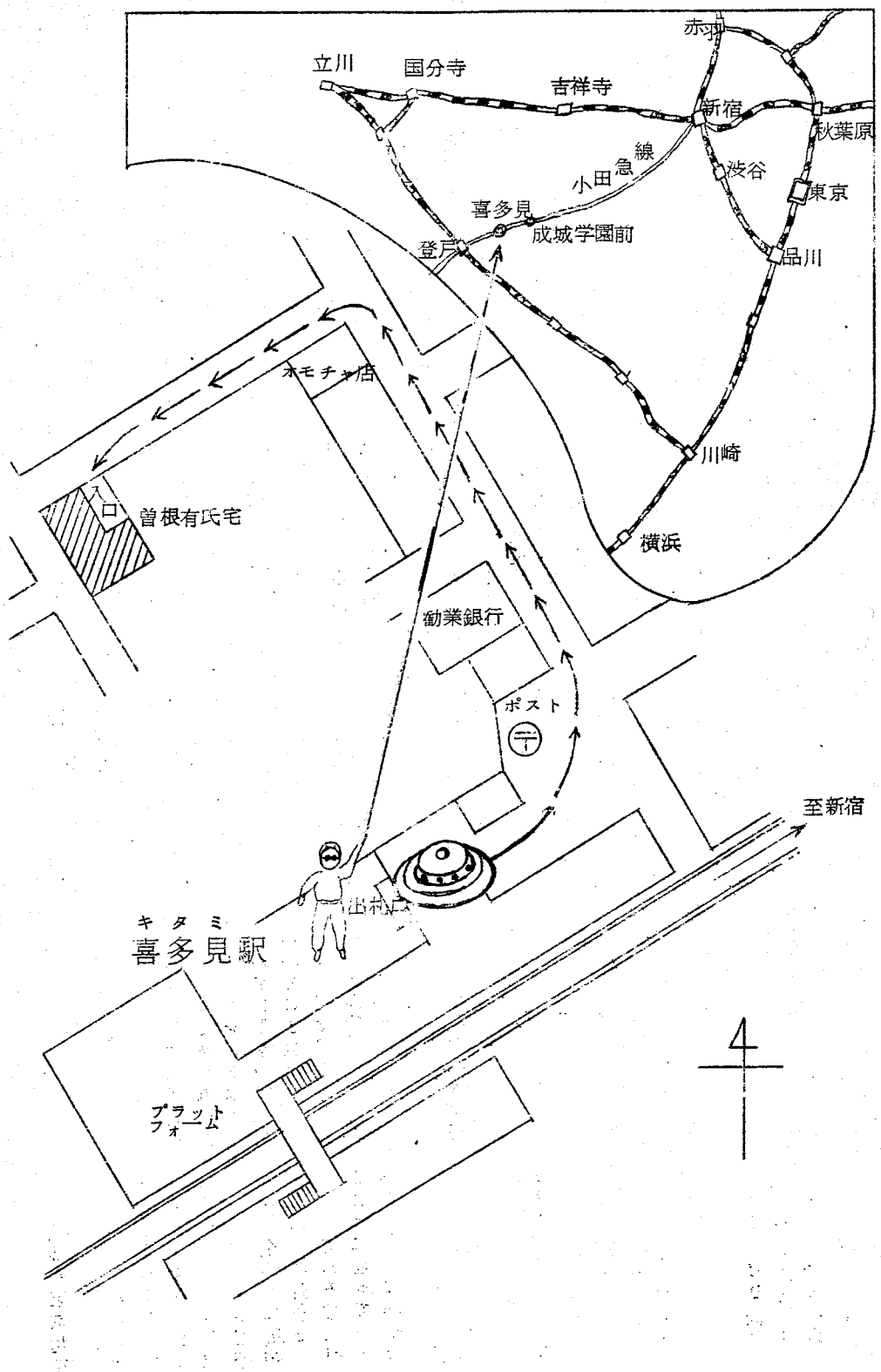
◎時間　午前九時から正午までは〝朝の会〟。正午から午後一時まで休けい。午後一時から午後五時まで〝昼の会〟。午後五時から午後六時まで休けい。午後六時から午後九時まで〝夜の会〟。

◎内容　〝朝の会〟は主として〝生命の科学〟を研究。〝昼の会〟は〝生命の科学〟その他のテーマについて全般的理解。三時から少し黙想。個人的な研究発表。講話。録音テープの公開その他。司会者は毎月交代。〝夜の会〟は主として個人的な話し合い。

◎会場　東京都世田谷区喜多見町二一八七、曽根　有方。電話（四一六）〇五一九。（二月までは世田谷区成城町の中田氏宅で行なっておりましたが、三月より曽根氏宅に変更しました）新宿からの場合には小田急線に乗って〝成城学園前〟駅（二月までのUD会合下車駅）の次の〝喜多見〟駅で降りて勧業銀行、オモチャ屋の前を通ってすぐです。詳細は左ページの地図を参照。

◎会費　一回一人百円（茶菓代等を含む）これはニューズレター誌代とは別。出席者には別製のパンフレットを差し上げます。

◎食事　各自持参にて可。ただし曽根氏宅から注文もいたします。携行品として毎回アダムスキー著〝生命の科学〟を必要とします。


赤羽
立川
国分寺
吉祥寺
新宿
秋葉原
小田急線
渋谷
東京
喜多見
成城学園前
登戸
品川
オモチャ店
川崎
入口
曽根有氏宅
横浜
勧業銀行
ポスト
至新宿
出入口
キタミ
喜多見駅
プラットフォーム

—編集後記—

◎本号は二月中旬に発行予定でしたが、一ヵ月も遅れる始末と相成りました。毎回遅れて申し訳ありません。今や資金も底をつき、加うるに多忙のために、本誌刊行は困難をきわめていますが、編者が健在の限り決して刊行を中止しませんからご安心下さい。会員各位の絶大なご支援と激励には心から感謝申し上げております。

◎本号からC・A・ハニー氏の〝テレパシー講座〟は掲載を中止することにしました。一般円盤関係の資料が輻そうしているのと、それに〝テレパシー講座〟の内容が近来きわめて難解な哲学的なものとなってきたために、円盤研究誌としての性格からはずれることなどがその理由です。ハニー氏はまれにみる英才で、その論説はすぐれていますが、生活のガイドとしてはアダムスキー著〝テレパシー〟と〝生命の科学〟で充分であろうと思います。

◎アダムスキー著〝テレパシー〟は文久書林から最近第三版が刊行されました。決して宣伝の行なわれない書物ですが、着実に人々の目にとまるようです。未入手の方は直接左記宛にご注文下さい。

東京都文京区西片一丁目一五の一八、文久書林（（振替・東京二五二一）。一部定価二三〇円。送料四〇円。

（注意！　文久書林は二月七日から右の新所在地へ移転しました）

◎本号中の記事〝モスクワ郊外に現われた奇妙な人物〟について詳細を知りたい方は左記の著書をお読み下さい。これは全篇がコンタクトの物語ではなく、大半は北極探険記なのですが、学問的価値の高い書物で、一読にあたいします。

アレクサンドル・カザンツェフ著〝宇宙から来た客〟

東京都千代田区富士見町、法政大学出版局発行（振替・東京九五八一四）定価三三〇円。三五〇ページ。

◎UDの会合は毎月確実に行なわれています。ご存知ない方が多いようなので、あらためて詳細を掲載しました。ふるってご出席下さい。出席者にはコピー器による別製パンフレットを配布しますが、これには本誌中に掲載しきれない興味ある有益な記事が載せられています。このパンフレットは都内在住の有志会員のご努力により少部数のみ作製されるものでして、GAP全会員に頒布する余裕はありませんからご了承下さい。三月十三日の会合では超心理学の研究家として高名な、本会の有力な会員である橋本健氏がテレパシー実験器の公開実験を行なわれることになっています。この実験器については同氏の著書〝超心理学入門〟に詳細な説明があります。

東京都千代田区神田佐久間町一の一一、株式会社　産　報（振替東京三六七八六）　定価三〇〇円。送料五〇円。

◎本誌のバックナンバー（旧号）は目下次のものが在庫しています。一九六三年九月十月号（一〇〇円）、六五年五月六月号、七月八月号、第三〇号（以上各一三〇円）

◎右以外の各号はすべて品切れとなっており、そのため旧号の増刷を望む声もありますので、都内の有志の方々のご厚意により、目下旧号の増刷を準備中です。これについては左記へご照会下さい。

神奈川県厚木市金田三八八、　和田道隆

◎本誌のこの部分を製版中に入った連絡によりますと、UD例会の際に出席者に配布するパンフレット〝日本GAP副機関誌〟は非出席の方でも希望者には頒布するということですから、送料共一二〇円を添えてUD会場担当の曽根有氏気付UD係へ毎月第一日曜日頃に申し込んで下さい。これは月刊機関誌です。

◎昨年十一月十九日より五日間早稲田大学で開催された早稲田祭

において〝宇宙円盤研究会（同大学学生森脇十九男氏主宰・日本GAPの外郭団体）〟は展示部門で参加し、当方提供の円盤写真その他の資料を公開して多大の成果をあげました。特に入場者からとったアンケートは興味深く、現代の学生の円盤問題にたいする反応を如実に示しています。この結果報告は同会発行の機関誌〝宇宙円盤研究会誌〟第三号に掲載されています。入手希望者は左記宛お申込下さい。送料共一二〇円

東京都新宿区戸塚町一ノ六〇七、柳井方、　森脇十九男

◎アダムスキーにたいしては依然として攻撃が行なわれており、なかにはひどく感情的になって妨害工作をする団体もありますが、私の信念は不動です。かつてニュージーランドGAPのヘンク・ヒンフェラーが私信でもって次のように言ってきたことがあります。

「感情的に対立してくるA氏の心理を分析してみれば、結局それは〝嫉妬〟以外の何物でもないことがわかる。（注。A氏とはニュージーランドの或る研究家）われわれは冷静な態度を持して勇気と忍耐力をもって前進しようではないか」

◎一九五二年十一月二十日、デザート・センターにおけるアダムスキーの歴史的事件の六名の目撃者の一人で、ア氏の秘書であったルーシー・マクギニス女史は、数年前ア氏のもとを離れて話題をまきましたが、これが巷間に伝えられるような〝ア氏に疑惑を起こして〟離別したのでないことは、昨年十二月にルーシーから私宛に来た次のような書簡によってもわかります。

「アダムスキー、キャロル・ハニー、その他私たちにたいしてあなたがこれまで如何に忠実な友であったかということを私はよく知っています。私もFSHL（注。実見記の略称）やITSS（注。同乗記の略称）に述べてあるジョージの体験や哲学を支持し続けています。また惑星人来訪の事実を知っています・・・」

◎米国GAP本部のアリス・K・ウェルズ女史から今年一月十日付私信が到着しました。これは当方から贈呈した〝生命の科学〟邦訳版にたいする礼状で、それによれば、米国ではア氏の支持者が次第に増加しつつあるということです。なおアリスと秘書のマーサとが写っているカラー写真が同封してありました。どちらも六十才くらいの婦人です。

◎去る二月十五日の午後六時頃、当市在住の私の友人である増野一郎氏が犬をつれて川の土手道を散歩中、突如北方の空にタマゴ型の白銀色に輝く物体が出現し、水平にかなりのスピードで東から西へ飛んで空中で消滅したのを目撃されました。氏は航空機研究家であり、また六インチ反射望遠鏡を所持する天体観測家でもあり、天空の観測には慣れている人ですから、先ずは円盤に間違いなかったと思っています。

◎全日空機の大惨事の際、テレパシックな予感によって乗らなかったために助かったという人が数名いるようです。今やテレパシー現象が存在することは厳然たる事実で、これが次第に一般で認識されつつあることは、マスコミが〝テレパシー〟という語をしきりに使用することでもわかります。私たちの努力は誤っていなかったといえるでしょう。お互いに頑張ろうではありませんか。

（久）

日本GAPニューズレター　1966　第三一号
翻訳編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP（別称・UD）
島根県益田市益田古川
振替・松江二六三〇（久保田八郎個人名義）
昭和41年3月10日発行
不定期刊
第31号
頒価一三〇円・送料二〇円